

Isabel de Andia (éd.) :

Denys l'Aréopagite et sa postérité en orient et en occident.

Actes du Colloque International, Paris, 21-24 Septembre 1994,

Institut d'Etudes Augustiniennes, Paris, 1997, pp.671

田子多津子

本書は、ユネスコの支援を受けて1994年9月にパリで開催されたディオニュシオス・アレオパギテスをめぐる第2回国際会議の記録である。第1回の会議は1992年アテネで開催されている。第1回会議の主催者 E. Moutsopoulos と第2回会議の主催者であり本書の編者である I. de Andia の序文によれば、第1回会議では、主としてディオニュシオス文書の思想の源泉に関する議論が行われ、第2回会議ではディオニュシオス文書の思想の後世への影響に関する議論が中心となったのであり、それは本書の表題に示されているとおりである。

本書には、以下の7つの区分のもとに30編の論文が収録されている——I. デイオニュシオスの写本の伝統, II. デイオニュシオスと新プラトン主義者たち, III. デイオニュシオスとヨアンネス・スキュトポリス, IV. 東方におけるディオニュシオス, V. 西方におけるディオニュシオス, VI. デイオニュシオスとバラマス主義, VII. 人文主義と近代。この区分にも示されているように、収録された論文の内容は、写本の伝統の研究から、現代にまで及ぶ否定神学におけるディオニュシオス文書の影響まで、時間的にも地理的にも広範かつ多岐にわたっている。第IV部には、ディオニュシオス文書と6世紀のキリスト論、証聖者マクシモス、イコノクラスム論争等との関係に関する論文が、第V部には、ディオニュシオス文書とアルベルトゥス・マグヌス、トマス・アキナス、ボナヴェントゥラ等との関係を論じた論文が収録されている。また

第Ⅶ部では、本会会員である熊田陽一郎氏が、Die Übersetzung des Corpus Dionysiacum ins Japanische という表題で、文書の日本語訳にまつわる、訳語と思想解釈の問題点を考察した論文を執筆しておられる。

ところで、第1回国際会議の開催年から本書の刊行年を含む1990年代は、ディオニュシオス文書のテキスト研究における着実な蓄積が公表された期間であった。従来、文書全体を取めているのはミーニュ版のみであったが、1990年にB.R.Suchlaによる校訂版 *Corpus Dionysiacum I, De Divinis Nominibus* (Berlin) が刊行され、続いて1991年にG.HeilとA.M.Ritterによる *Corpus Dionysiacum II, De Coelesti Hierarchia, De Ecclesiastica Hierarchia, De Mystica Theologia, Epistulae* (Berlin) が刊行され、これによって初めて文書全体の信頼すべきテキストの入手が可能になった。また、1993年にはM.Nastaによって *Thesaurus pseudo-Dionysii Areopagitae* (Trunhout) が刊行された。さらに1997年には *Corpus Dionysiacum III. 1* としてSuchlaの編集によるスコリアの集成が出版されたのである。

ここで30編の論文すべてに言及することは不可能であるので、上記のテキスト校訂作業の成果を直接取り入れたと考えられる2編を取り上げることにする。まず、第Ⅱ部に収録されているC.Steel, Proclus et Denys: de l'existence du mal にふれる。

『神名論』第4章においては、神の名について論ずるという本来の目的からの逸脱とも思われる、悪についての長々とした論述が挿入されている。この部分は、プロクロスの *De malorum subsistentia* (Guillaume de Moerbeke によるラテン語訳のみが伝存する) とのテキストの酷似が指摘され、J.Styglemayr と H.Koch が1895年にそれぞれ独立に、ディオニュシオス文書がプロクロスの思想の直接的影響のもとに成立したことを立証した際、その証拠とされたものである。Steel は、これらの業績を認めたいうで、Suchlaの校訂版とGuillaume de Moerbekeのラテン語訳に関する今日までの研究の蓄積をふまえて(Steelはプロクロス『バルメニデス註解』のGuillaume de Moerbeke訳の編者でもある)、『神名論』とプロクロスのテキストをあらためて詳細に比較検討し、『神名論』の悪に関する論述が後世に与えた影響を考察している。Steelはまず、多くの研究者が、『神名論』の悪に関する論述がきわめて多くの部分でプロクロスに依拠することを認めながら、なおも敢えてディオニュシオス文書独自の思想を見出そうとしていることに疑問を呈する。両者のテキストの比較から明らかにされるのは、『神名論』の論述がプロクロスの議論を徹底的に単純化して繋ぎ合わ

せ、時にはキリスト教的立場から改変しているということである。例えば、『神名論』では、悪について「善の欠如あるいは寄生物」というプロクロスの表現のみが取り出され、また悪がプロクロスには見出されない「不完全な善」という表現で置き換えられている。Steel によれば、『神名論』における悪の論述においては、悪の実在性に関するプロクロスの厳密な哲学的議論が省かれ、もっぱら悪はいかなる実在性ももたないというテーゼのみが強調されている。Steel は、決してディオニュシオス文書全体の独創性を否定するわけではない。しかし、悪の問題に関しては、長い間プロクロスのテキストが顧みられることなく、『神名論』の単純化された悪に関する教説のみが新プラトン主義的見解そのものとして後世に伝えられ、影響を及ぼした点を問題視するのである。この点は、ディオニュシオス文書成立の経緯やその後の権威づけの過程とも関わり、伝承史の観点からも興味深い問題である。Steel は、悪に関する論述についてディオニュシオス文書に対して非常に厳しい見方をしているが、テキストに即した詳細で具体的な指摘は説得的である。

思想の解釈と伝承という観点から、本書において関心を引くもう1編の論文は第III部に収録されている P.Rorem, *The Doctrinal Concerns of the First Dionysian Scholast, John of Scythopolis* である。ヨアンネス・スキュトポリスはディオニュシオス文書に対する最初の註の著者であり、おそらく文書の成立からほとんど時をおかずに文書全体に対する序文と550箇所以上にのぼる膨大な註を記した。Rorem が注目するのは、『第8書簡』の1節〈ὁλος ὁλος περιφύς〉(1088A)に付されたヨアンネスの註である。註には、「これによって、ディオニュシオスは、魂と肉体とをまとわれた主はそのことによってわれわれを魂と肉体とからなる全体として救う、ということ述べている」と記されており、Rorem はここにヨアンネスの主要な神学的関心が集約されていると見なす。ディオニュシオス文書全体への序文にも示されているが、ヨアンネスは受肉においても救済においても「魂と肉体からなる全体」という観点を強調する。ヨアンネスの註の中で神学的教義に関わるものは多くはないが、カルケドン公会議の立場に即したこのようなヨアンネスの観点がディオニュシオス文書の正統性と真正性を擁護するうえで大きな役割を果たした、と Rorem は主張する。ヨアンネスの神学的関心についてはさらに検討する必要があると思われるが、ディオニュシオス文書の影響史を論じようとする際、文書自体の研究と併せて註や翻訳の詳細な検討も不可欠であることを、Rorem の指摘は気づかせてくれる。

以上、本書に収録された論文のうちわずか2編にふれたにすぎないが、本書に何か統一的な視点を見出すことは不可能である。しかし、そのことがかえって、ディオニュシオス文書の影響の大きさと多様さを示すと共に、そこから生ずる様々な問題に目を向けさせてくれると言えよう。

Dimitri Gutas:

Greek Thought, Arabic Culture

*The Graeco-Arabic Translation Movement in Baghdad and
Early 'Abbāsīd Society (2nd-4th / 8th-10th centuries)*

Routledge, 1998, pp.xvii+230

仁子寿晴

現在イェール大学で教鞭を執る著者は *A Greek and Arabic Lexicon* の編者 (G. Endress との共編) を務めるなど、19世紀末のドイツに端を発するギリシア-アラブ研究の分野における現時点での代表的研究者の一人である。文献学という堅実な領域を活動の拠点としながら常に研究動向を左右するような刺激的な研究を発表し続けていることにグタスの特徴がある。例えば、今や Ibn Sinā 研究の基本文献に数えられる二作目の *Avicenna and the Aristotelian Tradition: Introduction to Reading Avicenna's Philosophical Works* (Leiden: Brill, 1988) では、H. Corbin らを中心とし、当時主流となっていた Ibn Sinā をアリストテレスの伝統とは異なる Oriental Philosophy (神秘主義的哲学といいかえてもよい) の観点から読み解こうとする試みを廃し、Ibn Sinā の思想の中には H. Corbin らが考えるような Oriental Philosophy は存在しないことを立証してみせた。

刊本としては三作目となる *Greek Thought, Arabic Culture* はペーパーバックでしか出版されておらず、一見、一般教養書の体裁をとっているが、内容的には、イスラム世界における科学と哲学を研究する上での重大な示唆が含まれ、肯定するにせよ、否定するにせよ、今後の研究の出発点となることは間違いない。

アッバース朝期前半バグダードで、ある場合にはシリア語を介して、ギリシア語文